

NEWS LETTER

from Iwami Art Museum

January 2009 vol.8



島根県芸術文化センター
SHIMANE ARTS CENTER
島根県立石見美術館
IWAMI ART MUSEUM

島根県立石見美術館ニューズレター

企画展 開館3周年記念展「アメリカの見た夢 1920~30年代の絵画、写真、デザインと日本」

「ニューディール」の時代のアメリカと日本

企画展「中尾 彰」展

どこかで見た懐かしさ

特別展「年中行事をたのしむ」

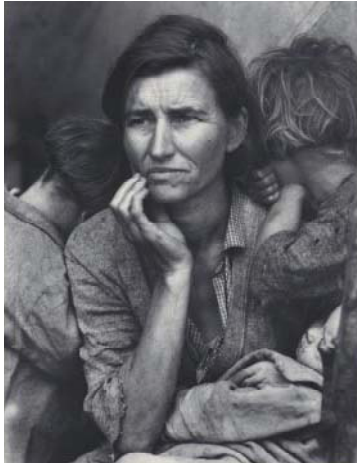
伝統文化の薫る暮らし

8



Lu Sturman 1940

ルウ・ストゥーメン 《雨のタイムズ・スクウェア》
1940年 京都国立近代美術館蔵



A



B



C

A. ドロシアラング《移住労働者の母、ニボモ、カリフォルニア》 1936年 京都国立近代美術館蔵

B. 《電気トースター》 トースター社 1938年 宇都宮美術館蔵

C. 記録写真「ワシントン・ハイツのダイニングルーム」 1948年頃撮影 工芸財団蔵

「ニューディール」の時代のアメリカと日本

1929年10月24日、ニューヨーク株式市場で株価が大暴落したのをきっかけに、世界中に波及した「大恐慌」は、アメリカを長期にわたる不況に陥れた。共和政のフーヴァー政権の不況対策はほとんど成果がなく、1933年アメリカの失業者は1500万人にも上った。この年、フーヴァーの次の大統領に就任した民主党のフランクリン・ローズヴェルトは、「ニューディール」と呼ばれる政策を実行する。「ニューディール」によって、アメリカ経済はある程度の回復をみせたが、1929年の水準に戻るには、第二次世界大戦への参戦まで待たなければならなかった。

こうした1930年代の不況の時期、特に厳しい状況に追い込まれた農民たちを救済するために、「ニューディール」の一環として「FSA(農業安定局)」が設立された。FSAの写真家ドロシアラングの《移住労働者の母》(図A)は、カリフォルニアへ移住してきた農民の女性が、苦しい生活を強いられている様子を写している。三人の子供を抱えた母親は、あごに手を当てて遠くを見ている。額の皺や、汚れた衣類からも彼女の困窮が伝わってくる。このイメージは、写真というメディアを使って農民たちを記録しようとしたFSAのプロジェクトの中でも、最も有名なもので、アメリカ中に農民たちの深刻な状況を印象づけた。

一方で、「流線形(ストリームライン)」の乗り物が流行し、モダンなデザインが広まったのもこの時期だった。アメリカでは、レイモンド・ローウィやノーマン・ベル・ゲッデスら、工業デザイナーたちが登場し、華々しく活躍したのだった。彼らの新しいデザインは、ヨーロッパのアール・デコやバウハウスなどが源泉だったが、「流線形」のようなシンプルなデザインの工業製品が、一般的な家庭にまで広まったのは、アメリカの特徴である。不況のため、生産者はデザインによって消費を促そうとし、消費者は便利で効率のよい経済的なイメージを求めた結果でもあった。

また不況に見舞われてはいたが、一般家庭に「流線形」の家電製品が普及するなど、日本に比べ豊かな生活を実現していたアメリカは、当時の日本にとって重要な輸出市場だった。日本の輸出品の中でも、陶磁器は重要な位置を占め、「リタケ」に代表されるように、日本はアメリカに最も多くの陶磁器を輸出していた国だった。商工省の貿易局による海外調査員として、1938年にアメリカを訪れた工芸指導所職員の齋藤信治は、こうした輸出市場としてのアメリカの様子を『工芸ニュース』誌で報告している。記事では、アメリカ市場の大きさや、日本製品の輸出拡大の可能性を伝える一方、やはりアメリカの家電が紹介

された。食パンを片方の側面から入れると、焼かれてもう片方の側から出てくる仕組みのモダンなデザインの《電気トースター》(図B)の図版が掲載され、「便利で能率よいトースター」と説明が付されている。日本でも、アメリカのモダンな家電が、注目されていたのだった。

しかし、アメリカとの関係は悪化し、1941年に日本はアメリカと戦うことになる。この戦争の後、政治的にも文化的にも、戦前とは比べものにならないほど大きな影響を、日本はアメリカから受けるようになった。例えば、終戦直後の時期には、日本にやってきた占領軍の兵士によって、憧れの対象だったアメリカの文化に、直接触れるようになり、また占領軍兵士と家族のための家「ディペンデント・ハウス」(図C)の建築や、そこで使われる大量の家具、食器、家電の生産を日本が請け負ったことは、工業製品の生産技術の向上に大きな役割を果たしたといわれている。

終戦から六十数年の歳月を経た現在、アメリカ経済の危機が報じられ、2009年1月には、「変化(change)」をスローガンに掲げた民主党のアメリカ大統領が誕生する。こうした新たな状況に備えるために、前世紀前半のアメリカと日本の姿を、もう一度振り返ってみてはいかがだろうか。

(河野克彦 当館主任学芸員)



図1



図2



図3

図1.《静物》 1931年 第1回展 独立美術協会入選作

図2.《窓B》 1937年 第7回独立美術協会展独立賞

図3.《庭前にて》 1980年 第48回独立美術協会展出品
いずれも島根県立美術館蔵

どこかで見た懐かしさ

中尾彰は1904年(明治37年)島根県津和野町に生まれた。中国山地の山間で小学校まで過ごし、10代は満州で過ごしている。夢見がちで感受性の強い少年時代を、中尾は折々の文章に残している。帰国後、教師を勤めながら画家修業を重ね、画家としてのデビューは27歳の時。昭和6年東京府美術館で行われた独立美術協会第1回展で《静物》(図1)という作品が入選したのがそれにあたる。この作品は現在、松江の島根県立美術館の所蔵だが、いかにもフォーヴィスム風の作品で、中尾が当時最も漸進的な作風を追いかけていた事がわかる。独立美術協会は、昭和5年に里見勝蔵や、林武ら13名で結成され、「真に日本美術の世界的確立」と「至上芸術の顕現」を目指し、当時の日本の画壇に強い影響力を持っていたフランス美術からの「独立」を意図して発足した。まだ20代の、しかも正規の美術教育を受けているわけではなく、頼るべき仲間の乏しかった地方出身者の中尾は、こうした新しい時代の息吹を感じさせる在野の美術団体の動きを敏感に感じ取り、飛び込んでいったのだろう。実際、独立美術協会はフォーヴ系の作風が中心で、1930年代前半の中尾の絵はあからさまに林や里見の影響が見て取れる。あからさま

とはいえ、残された作品は、全くの独学でここまでフォーヴを咀嚼したものだと感じするべきである。しかし、中尾自身、自分の作品に林や里見らの影響が強すぎる事に気づいたのであろう、30年代後半からは、フォーヴ系の作品であることには変わりはないが、早くも自分なりの表現をつかみ始めている。画面は青や緑が基調となり明るく鮮やかで、30年代前半の重苦しさ、重厚さが取れていく。中尾の青を基調とした絵は、どこか松本竣介の作品を思い起こさせるが、中尾は竣介よりも8歳年長であるから、影響というよりも絵を描く上で二人が知らずに同じような過程を踏んだということだろうか。当時中尾は練馬区江古田に居を構えたが、現在の池袋周辺、豊島区、中野区、練馬区のエリアは、大正末から昭和の戦前にかけて、多くの画家たちが住んでおり、お互い切磋琢磨していた。中尾と竣介はそれの中でも比較的近いエリアに住んでいたから、一面識くらいあったかもしれない。

40年代に入ると、作家活動の他、子供のための美術を提唱し、戦後にかけて多くの童画を制作していくことになるのだが、ごく一般的によく知られているのは、童画の世界だろう。子供の頃に読んだ絵本に、また学校で使った教科書に、中尾の軽やかで

懐かしい挿絵が随所に見られた。描いた人の名前は知らなくても、絵に見覚えのある人は多いはずである。はじめは生活の糧を得るための挿絵業であったかもしれないが、もともと文学的志向の強い中尾は、詩をよくし、文芸同人誌『日曆』の同人でもあったくらいだから、言葉をとまぬ絵である絵本や挿絵の仕事が自分の創作活動の中で矛盾するものではなかっただろう。60年代にはいわさきちひろらと「ぐるうぷ聖(かべ)」を結成している。このちひろも練馬に住んでいた。若い頃は、童画とは別に造形的に意欲的な作品を数多く描いた中尾だが、晩年になるにつれ、色彩はより明るくなり、童画との境目は曖昧になり、融合していくかのようだ。

今回の展覧会では、中尾がそれぞれ暮らした土地である島根、練馬、茅野の3つの美術館での開催であり、この3館所蔵の油彩画を中心に、画家中尾彰の全体像にせまる初めての試みである。重厚な油絵の表現がどのように変化していったのかを見てもう絶好の機会となろう。もちろん、懐かしい絵本や、絵本の原画なども登場する予定である。そうした作品が一堂に会した時、見えてくる何かを楽しみにしてもらいたい。

「年中行事をたのしむ」

2009年4月25日(土)～6月15日(月)

休館日:火曜日 開館時間:午前10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)

伝統文化の薫る暮らし

昨年(平成20年)のゴールデンウィークに開催したイベント、「室町文化フェスティバル」をご記憶でしょうか。益田の地が、益田氏によって中世(室町時代)に栄えたことにちなみ、室町時代発祥の伝統文化(能、狂言、茶道、華道など)を中心として、グラントワをはじめとする益田の街で様々な文化事業を開催しました。そして来年度以降も、おなじくゴールデンウィーク時期に「室町」をキーワードとした文化イベントを継続して行うこととなり、次回に向けた準備を始めているところです。

石見美術館では「年中行事をたのしむ」と題した展覧会を企画中です。この展覧会は、私たちがなげなく接している五節句をはじめとする年中行事について、美術作品にどのように表されているか、それを人々がどのように受け止めてきたかを見つめてみようとするものです。

例えば、ちょうどゴールデンウィークにあたる端午の節句。今では「こどもの日」、「男の子のお祭」として、五月人形や鯉のぼりを飾りますが、こうした風習は江戸時代頃から行われるようになったものです。それ以前の端午の節句がどんなものだったか、例として室町時代の記録をのぞいてみましょう。

室町幕府の年中行事について記した「年中恒例記」という文献があります。五月の部分を見てみると、一日には「お祝いのお酒に菖蒲しょうぶをさぎんで入れる」とあります。四日には蓬よもぎと菖蒲を御殿の屋根にふいたり、色々な場所に飾ります。そして節句の当日、五日には、蓬と菖蒲が入ったお風呂や、粽ちまき、薬玉くすりたまなどが用意されたことが記されています。「薬玉」というのは、お祝いの時に用意される、中に垂れ幕や花が入った、あの「くす玉」の形を想像していただければよいのですが、引張って割るものではありません。蓬や菖蒲などの植物と、美しい色の糸などで作る飾りで、端午の節句から重陽の節句(九月九日)まで飾っておくもので、魔除けや招福の祈りがこめられたものです。今の端午の節句のような、子ども中心のにぎやかなものではなく、意外と質素なものだったことが分かります。しかし、色や香りを想像してみると、大変さわやかな、初夏にふさわしい行事のように思われます。

いわゆる「五節句」とよばれる、人日(正月七日、七草粥を食べる)、上巳(三月三日、桃の節句)、端午たんばつ、七夕、重陽(菊の節句)は、いずれも植物や食べ物、お酒などに彩られた行事です。古来、日本の人々は季

節ごとに自然の恵みを受けとり、美しく、おいしく、楽しみながら幸福を祈ってきたのです。

展覧会には、江戸時代の終わり頃に津和野藩のお抱え絵師として活躍した山本栞谷やまもと せいたかが、年中行事を描いた屏風を展示します。六曲一双屏風の一扇(1枚ずつのパネルのこと)ごとに一枚ずつ絵を貼りつけているので、全部で十二枚になり、ちょうど十二月と一致します。ここに一月から十二月までの行事が、飄々とした筆づかいで描かれています。(一部、入れ替わっているところがあります。)五節句以外にも、四月の花見や八月の夕涼みなど、季節を楽しむ庶民の姿がユーモラスに描写されています。

さらに本展には、当館収蔵品に加え、室町時代創業の老舗和菓子店、株式会社虎屋より、季節のお菓子を描いた絵画を特別にご出品いただく予定です。どうぞお楽しみに。

忙しい毎日、季節の移り変わりをつい見逃してしまいがちですが、時には昔ながらの行事を振り返り、美しい飾りや、素朴な味や香りのする食べ物を楽しんでみてはいかがでしょうか。

(川西由里 当館主任学芸員)



山本栞谷《年中行事図屏風》 当館蔵